

強いられるためにテントに戻る。翌日、夜明け前から動き始めるつもりで就寝。その夜から降雪が激しくなる。

5日目。降雪は明け方まで続いたので、起床を遅らせる。夜が明けて、不安とともにテントの外に出ると、雪壁にもあまり雪は付着しておらず、安心して出発。低温、ラッセル、それに視界不良により時間がかかったが、午前9時過ぎ、無事に登頂。すぐに下山を開始し、テントを撤収後に北西壁側に下降を開始。途中から吹雪が始まったが、なおも下降を続ける。20回以上の懸垂下降の末、日暮れ直前に氷河に降り立つ。

6日目。反対側の尾根に向かってガリーを登り返し、尾根からは岩の斜面をBCに向けて一直線。午前中にはBCに戻る。

8/11 BC滞在最終日。片付けとホールバッグ回収。その後、ボルダリング。

8/12・13 バックキャラバン。BC～サイチャー～フーシェ。その後スカルドゥまで車で戻る。

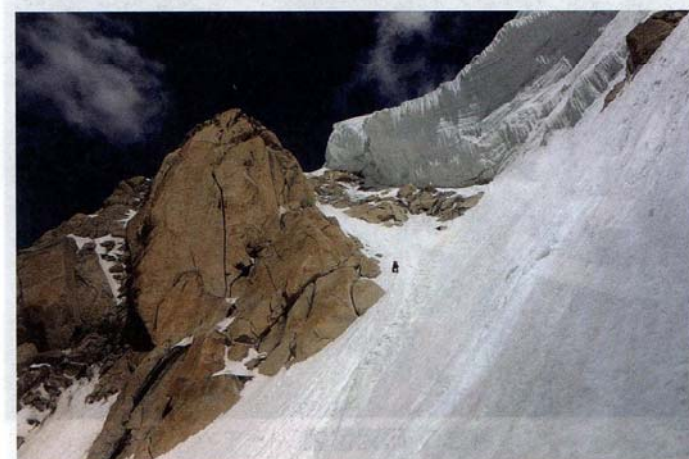
8/14 フライトにてイスラマバードまで。と思いきや、フライトキャンセルにより急遽車をチャーターし、陸路でイスラマバードまで向かう。横山は車酔いにより一日中グッタリ。本遠征中、最も辛い時間であった。

8/15～17 イスラマバードにてウダウダ。ひたすら漫画を読み漁る。

8/18 帰国。成田空港で日本食とビールで乾杯し、40日間の遠征を終える。

いつもの遠征に比べると、トータルの現地滞在時間は短く、また街での準備にも時間がかかったため、BC滞在はたったの3週間であった。「まともなトライはできるのだろうか？」という不安に追い打ちをかけるように天候も安定せず、順応活動にも支障をきたすほどの降雪があったりして、ネガティブな要素が増えていった。

それでも、結果的には2チームともに満足のいくクライミングができて、本当にうれしい限りだ。どちらも、一番の目標に掲げていたクライミングはできずに終わった



リッジ最上部は左のセラック下から巻く



Sun Patch Spur下部岩壁の最上部はボロボロの岩

が、それを凌駕するくらい内容の濃いクライミングで、これまでの登山経験の中でも一、二を争うほどの難易度とクオリティの高さだったと自負している。これまでに培った経験がやっと花開いた結果と言えるだろう。

ここ数年は、ヨセミテやパタゴニアで岩登りを中心とした活動ばかりしていたが、そういう経験がなければ今回の結果はなかったと思うし(特にベアトリス)、また、かつてアラスカやアンデス、ヒマラヤなどでひたすら冰雪壁、ミックス壁を登り込んだ経験がなければ、上部で敗退していただろうことも容易に想像がつく(特にK7 West)。またそれら以前に、国内における登攀では海外を意識したトレーニングを夏冬通じて行なっていて、そういうすべての経験の積み重ねが今回の結果だと言えるだろう。今回のメンバーは全員が1979年生まれの38歳(佐藤は12月に38歳になる)。30代の集大成と言えるだけの登攀ができたと思う。

それぞれが理想の登攀を思い描き、それをヒマラヤの大きな山の中で具現化する。こんなに贅沢で充実感のある時間を持つことができたのは幸せである。サポートをしてくださった各スポンサーならびに山仲間、家族、そして日本山岳・スポーツクライミング協会に感謝したい。

#### ■メンバー構成

隊長:横山勝丘(38歳)、長門敬明(38歳)、増本亮(38歳)、佐藤裕介(37歳) 計4名



K7 West山頂にて。左:長門、右:横山